

時間表現「いま」の考察——「求心性」に注目して——

Property of Temporal Expression “*Ima*”: Focusing on “Centripetality”

川端元子†

Motoko Kawabata

Abstract This paper examined the meaning of “*ima* [now],” a temporal expression in contemporary Japanese that basically represents the point of time of an utterance. It has so far been pointed out that, although “*ima*” sometimes may represent a point of time before or after an utterance, it always converges to the point of time of an utterance. This is due to, among others, the fact that “*ima*” basically does not have a temporal range and that it does not take a value by itself. This is confirmed by the fact that expressions such as “*ima no aida*” or “*ima no ato*” are unnatural ones that only occur under particular circumstances. Based on these, “*ima*” was characterized as having a property in common with expressions of time, space, and extent that converge to the prototype, such as “*uchi*,” “*hodo*,” and “*yor*.” This property was explained as “centripetality.”

1. はじめに

時間表現「いま」は、一般に発話時点を表すものとされている。しかしながら、これまでの研究により、発話直前（過去）や発話直後（未来）のことも表しうることが確認されている（渡辺1991ⁱ、仁田2002ⁱⁱ、森本2006ⁱⁱⁱ）。

- (1) いま話したことは本当です。（発話直前）
- (2) 是非と言われるなら、いま行きます。（発話直後）

これについては、「いま」が動詞を修飾している場合、基本形が現在のことを表す「ある」「いる」など以外のもは基本形が未来のことを表すというテンス・アスペクトの問題から説明されている。「ある」「いる」以外の多くの動詞は、基本形が未実現のことを表し、「た」によって事態の実現を想定する。そして「ている」を用いることによって発話時点の状態を表すことの反映だとするものである。

また、「いま」が発話時点をあらわすことができない場合の考察もなされている。発話時点において視聴している映画を「いまの映画」とは言えず、「この映画」としな

ければならないといったことがその例として挙げられている。

- (3) [*いまの映画／この映画]は非常に面白い。（発話時点で鑑賞中）

上のような「いまの」が発話時点を表すためには、「いまの映画」が「昔の映画」と対比されて、「当世の」「近頃の」「現代の」などといった意味に用いられている場合となる。

さらに、「いま」が「この」や「これ」といったコ系指示語と異なり、「まえ」「あと」「さき」などといった空間表現から転じた時間表現と共起しにくいことも指摘されている（田口2008^{iv}）。この考察においては、「いま」が方向性を持たないことが理由とされている。

このような「いま」の性質と共通すると考えられるのが、空間表現や時間表現に用いられ、かつ、「いまのうち」のように「いま」と共起する「うち」である。渡辺（1995）は「うち」の性質として「求心性」を挙げているが、このような捉え方を「いま」の性質を考えるうえでも重要と考えている。そこで、本稿では「いま」の性質に「求心性」があることを述べ、時間や空間の指定に関わる語の意味への視覚が、他の語においても有効な枠組みであることを示す。

2. これまでの「いま」に関する研究

2・1 発話時現在をあらわす「いま」の性質

「いま」が発話時点を表すといっても、それは話し手にとっての発話時点であり、直接的な対話以外の手紙や中継録画のような場面では話し手の「いま」と受け手の「いま」は完全に一致しない(田窪 2002)⁹。受け手はあくまで話し手の「いま」として理解することになる。これは、発話時現在を表す「いま」があくまで発話主体の認識によるものであることを示している。

さらに、「いま」は現場性も強い。話し手自身のことであっても発話の現場でないことについては、「いま」ではなく「いまごろ」が用いられることも指摘されている。

- (4) 明日のいまごろにはニューヨークに着いているだろう。
- (5) 1年前のいまごろは何を考えていたのだろう。
- (6) いまごろ彼はどこでどうしているのだろう。

(4)(5)の「いまごろ」は、時間軸上を移動し、特定の日に発話時と同じ条件で対応する時点を設定したものであり、(6)は、話し手が直接関与できない離れた空間への発話時点の移動である。話し手にとって未確定の発話時は推論を伴うため、「いまごろ」が用いられるということは、「いま」が発話の現場に存在する発話時現在であることをよく示している。発話主体によって確定できないものであるため形態上「ころ」を伴うが、発話主体が時間や空間を移動した自己を設定すると考えるなら、「いま」は、やはり発話主体の枠組みで認識されている。

2・2 発話時を含む時間の中心的存在である「いま」

「いま」が発話時点以前のことも表現できることは渡辺(1995)、仁田(2002)や森本(2006)に指摘があるが、仁田や森本は以下のように説明する。

仁田(2002)では、「いま」は「発話時を基準とする時の成分」の下位に位置する「発話時を含む時間帯」を表すものの一つである。そして、発話時点そのものを表す副詞「現在」「目下」「今のところ」類と、発話時を含む幅を持った時間帯を表す副詞「今日(きょう/こんにち)」「今月」「このところ」類との両者の性格を併せ持つものと位置づけられている。

さらに「発話時点」と「現在」を質の異なるものとして説明するのが森本(2006)である。具体的には、「はっきりと終わったと認識できる過去と、まだおこっていないと認識できる未来の間に、発話時点を中心とした虚構

的な現在」(同)を想定するというものである。そして、発話時点前後に継続して展開している事態が存在するとき、発話時点を含めた発話時点前後の時間が「いま」で捉えられるとする。

- (7) いま書いた三角形を再度動かします。(発話時点以前)
- (8) いま [ある/残っている] 在庫をすべて処分する。(発話時の継続)
- (9) 少し待っていて下さい。いまそちらに行きます。(発話時点以後)

注意すべきは、このような現象は「いま」が「テンス、アスペクトを示す言語形式と共起する場合にこれらの違いを生じる」のであって、「発話直前、発話時点の継続、発話以後のように3つの視点に分かれているわけではなく、広がりを持ったまま存在」(森本前掲)しているという点にある。

2・3 話し手の視点で捉えられる「いま」

渡辺(1995)では、「こんど」と「いま」の類似性が指摘されている。そして、「こんど」と「つぎ」とは時間の流れの捉え方が異なると述べられ、その根拠となる現象として次のような例が挙げられている。

- (10) {こんど/つぎ}の部長はファッションセンスがいい。
- (11) {こんど/つぎ}の部長はやさしい人がいい。

上の例で「つぎ」を用いた場合、いずれも発話時以後のこととなるが、「こんど」ならば、発話時現在着任している部長(12)も発話時以後に着任する部長を(13)も表すことができる。また、「こんど」は常に発話時を離れて設定することはできないが、「つぎ」は過去のことにも未来のことにも設定できる。

「こんど」と「つぎ」のこの相違について、渡辺は時間の流れを捉える視点から説明している。時間の流れについて、常に発話時の自分の位置(いま・ここ)を基準として主観的に捉えるタイプを「わがごと」的な時間のとらえ方、年表を眺めるような客観的視点から時間の流れ捉えるタイプを「ひとごと」的な時間のとらえ方とするものである。これに従えば、「こんど」と「いま」は、「わがごと」の時間把握であり、「つぎ」は「ひとごと」の時間把握となる。ただし、「こんどの」には発話時と同じ条件を持つ未来の特定日に設定することができ、そのため、繰り返しのイメージが伴う。

- (12) {こんどの/いまの} 授業には辞書を必ず持ってくること。

このような用法は「いまの」ではなく、「いま」があくま

で発話時から離れることができないことを示している。

森本 (2006) は、「いま」が発話時点を含む幅のある時間を表すものでありながら、「いまの+名詞」が発話時点以前に偏ることをとりあげ、「いま」が話し手の視点に深く関わっているという点から説明している。

(13) いまの発言は失敗だった。

話し手の視点とは、その事態の開始から終了 (完成) のどの位置にいて事態を見ているかという「時間軸上の話し手の位置」のことと言い換えられる。「いまの+名詞」が使える場面では、被修飾語の名詞が「発話時点において確定していると発話主体に認知されることが必要」(森本 2006) ということは、名詞が表す事態が発話時点で完了あるいは完成した事態となるのが自然である。したがって、「いまの+名詞」が発話時点のものを表すためには、「いまの家 (いま住んでいる家)」のように、発話時点において継続している状態にあるか、所有の状態にあることが必要となる。

しかしながら、発話時点において継続しているものであっても、発話時点を表すためにコ系指示語を用いなければならぬ次のような例もある。

(14) いまの話はとても面白い。

これも先述 (2・2) の「虚構的現在」(同) によって理解できる。発話時点で完了したひとまとまりのものとして発話主体に認知されておらず、「虚構的現在」のものであれば、「いまの話」とはなりえないのである。

渡辺 (1995)、森本 (2006) とともに、「いま」が発話主体の視点に関わった表現である点で共通する。

3. 「いま」の性質

3・1 対比によって姿を現す「いま」

通常は発話以前のことを表わす傾向が強い「いまの+名詞」だが、「いまの」に修飾される名詞が発生から完了までのプロセスを持たず、自身に継続性を含まない「いまの若者」のような例においては、発話直前と発話時点を含む時間の二通りに捉えることができる。

(15) いまの若者はファッションセンスが優れている。

これは、「昔」との対比で「いま」が捉えられるときに生じる (森本 2006) 解釈である。これについてもう少し掘り下げてみたい。

森本 (2006) は市川 (2002) ^{vi} の次のような用例に注目している。

(16) 毎日学校の教室の中で日本語を勉強して日本語を話します。しかし、わたしはいま日本語はあまり上手ではありません。

(市川 2002)

上の例においては、「いま」ではなく「まだ」の方が適当であり、森本も「いままだ」とすべきであると述べる。「いま」の時点について何らかの程度評価をするためには、日本語が上手になった時点との比較が必要であり、「いま」はそのような「基準や比較の概念を含まない」というのがその理由とされている。しかしながら、「いまは」とすれば許容度が上がる。

(17) 毎日学校の教室の中で日本語を勉強して日本語を話します。しかし、わたしはいま日本語はあまり上手ではありません。とりたての「は」が加わることによって、対比的な意味合いが生まれる。すると、「いま」と対比的に捉えられる「非いま」が意識される。たとえば、「日本語がうまくなった時点」に対する「いま (日本語があまり上手ではない)」として捉えられるのである。「いま」は「比較の基準とはなれないのではなく、他に基準が与えられてはじめて位置づけられるものということが確認できる。

このことは、先ほどの「この」と「いまの」の相違と共通している。発話時に継続中で事態が確定していないものは「いまの」で修飾できない。程度や比較においても同様で、比較対象が存在しなければ発話時の状態をどのように評価してよいのか確定しないのである。対比されるものがなければ「いま」は単独で特定の値を持つことができないことが分かる。

3・2 単独で値を持たない「いま」

コ系指示詞と「いま」の違いについてもう少し見てみよう。

竹内 (2007) ^{vii} には、「いまから/いままで」と「これから/これまで」の相違点を考察し、「いまから」は発話時点の起点とすること、「これから」は起点が発話時点と切り離されていることを指摘がある。また、次のように「これから」は、発話時点を基準として過去にさかのぼることができないとする。

(18) 僕が「王様のレストラン」というドラマを書いたのは、{今から/*これから} 八年前のこと。(竹内 2007 用例 (10))

竹内はこの理由を、「これ」が方向性を持ち、「いま」自身が方向性を持たないことにあるとする。このような現象については「これから」や「これまで」が未来 (展望) や過去 (歴史) の意味を持つ次のような名詞的用法と併せて興味深い。

(19) 日本社会の [これから/今後/将来/*いまから] について語る。

(20) 大阪府の議会改革の [これまで/*いま

まで]を検証する。

(21) 君とはもう[これまで/*いままで]だ。

上の例の「これから」や「これまで」の「これ」は、必ずしも時間軸上の一点を表しているのではない。上の例における「これ」の内容は、「これから (の状況)」や「これまで (してきたこと・経緯・実績)」、「これ (きっかけとなる今回のできごと) まで」などである。つまり、「これ」が表すのは発話時点での一定の状況や事態である。したがって、「これ」単独で値を持っていることになる。また、このように事態が発生して進展・終了するプロセスは時間の流れに従う一方方向性のものであるので、「これ」は方向性を持たざるを得ない。「いまから」「いままで」がこれらの用法を持たない(竹内 2007)のは、「いま」が単独で値を持たないことと関係するのである。

さらに、田口 (2008) は「いまの先」「いまの後」「いまの前」などの用例がほとんど無いことをもとに、「いま」が時間や空間の表現と共起しにくいと述べる。そして、「いま」は時間の流れにおける前後関係を定める基準となる方向性を持たないとしている。

しかしながら、時間や空間の表現と「いま」との共起においても一様ではない。たとえば、「あいだ」「あたり」なども「いま」と共起しにくい、類似の「うち」や「ところ」は「いま」と共起する。時間の流れにおける「いま」のありかたとともに、「いま」が時間に関わる語彙とも共起の差があることについて次に考えてみたい。

4. 時間の軸上の「いま」

4・1 事態の所属する時点

「いま」は発話時点を含んだ幅のある時間をあらわすものであるとしながら、あくまで発話時点をさすことが中心であることは何を示しているのだろうか。

たとえば、他の何かと対比的に捉えられた「いま」の事態は何らかの値を持っているはずである。ところが、実際には必ずしもそうではない。

次の例は、「いまの+名詞」が発話時に継続中のものを表す例である。

(22) あともう少し。いまの話が終わったら帰るよ。

上の例は、「いまの話」が終わった時点での発話とはとれず、発話時点に継続中の話として理解することができる。この場合、「その前に聞いた話」や「このあと行われる話」との対比で捉えていると推測できる。このような場合は、ただし、そのように捉える「いまの話」には時間的な幅は考慮されず、単なる時間軸上に並ぶ事象として意識さ

れる。「いまの話」や「さっきの話」はあくまで連続した事象の一つであり、その継続性やその長さや中身は一切問題にならない。

そもそも、「いまの話はおもしろかった」のように、「いまの話」が発話直前のことを表している場合であっても、発話時点で新たな話(次の話)を認知している場面では用いられない。この場合は「さっきの話」となる。「いま」で捉えられている事態は事象の時間的長さとは関係なく、話し手が時間軸上をどこで区切っているか、そのどの部分を発話時の自分や事態の所属位置としているかを表すものである。たまたま前のできごとと後のできごとの間がどれくらいの期間だったかによって、時間の幅に違いが生じるにすぎない。基本的に、多くの「非いま」時点に対する「いま」の捉え方の提示となる。これは、次のような比較を含んだものについても同様である。

(23) いまは日本語はあまり上手ではありません。

上手になったと想定する「時点」との対比であり、どれくらい上手かという程度を対比するものではない。時間軸上での別の時点(非いま)から対比的に捉えた「いま(発話時点)」である。

4・2 二種類の時間の流れと視点

時間の流れのとらえ方は、これまででも示されてきた(渡辺 1995、阿部 2001^{viii}、碓井 2002^{ix}) が、川端 (2010)^x においては次のように設定した。

(24) 主体の動きの方向に注目し「主体」に視点を置いた述べ方。…「あと」は過去(主体の進行方向の背後・後方に残されたもの)

(25) できごとの発生順に注目し、「できごと」に視点を置いた述べ方…「あと」は未来(基準時において未成立のもの、時間的順序で後続するもの)

時間の流れは一方方向だが、視点の相違によって二種類の「さき」と「あと」が存在している。(24)は主体の具体的行動がイメージされる〈主体視点〉であり、「さき」は未来である。(25)は主体の行動のように見えるが、たとえば、「電車に乗り遅れた」は「電車が出て行った後に駅に着いた」ことであり、電車の到着が先で自分の到達が時間的に後続するできごとである。したがって、「さき」は過去となる。このときの時間の把握は、できごとの発生や成立を自分との関係からとらえた〈できごと視点〉のものとなっている。

この二つの視点を用いれば、「いま」が発話時点を含む未来や過去を表すことが可能であること、すなわち、「い

ま」が副詞として動詞を修飾する「いま行きます」が発話直後を、「いまの」が名詞を修飾する「いまの発言」が発話以前の事態を表すことも説明できる。

「いま行きます」は、発話主体の具体的行動を述べたものであり、発話主体にとっては(24)の視点での発話である。発話主体が発話とともに行動を開始して終了すると行った一連の流れは発話主体の「前方(まえ・さき)」に存在している。つまり、「いま」は未来に拡張されている。

一方、「いまの発言は失敗だった」の「発言」は主体の行動が完成した時点で一つの事態(できごと)として存在する。出来事の順番としては、出現時間の早いできごとが過去となるといったできごとの流れを捉えたものである。これは(25)の〈できごと視点〉となっている。この場合、時間に幅のある事態なら、事態は時間の進行とともに過去になっていく。すなわち、発話主体にとっては経験時点から過去に向かってできごとが進行することになるので、「いま」は過去に向かって拡張される。

これらはともに、発話主体の内的基準によるものであり、いずれも渡辺(1995)によるところの「わがこと」視点である。なお、それ以外に、時間の流れを俯瞰する第三者の視点、すなわち、「ひとごと」視点が設定できる。

- (26) 時間の流れと出来事の発生を第三者の視点から捉えた述べ方…「さき」や「あと」は物事の関係としてのみ示される。

空間を表す語彙や時間を表す語彙と自由に共起するコ系指示語は、(26)のような第三者の視点で時間の流れとその中で推移するできごとを捉えたものと考えられる。さらに、「さき」や「あと」は、本来「ひとごと」的な時間のとらえ方をするものであり、物事の空間や時間の基準との関係を客観的に表すものである。「わがこと」的な時間のとらえ方をする「いま」はこれらとは共起しにくい。

ただし、他の基準によって対比的に把握される「いま」が「まえ(さき)→いま→あと(つぎ)」という関係に組み込まれるときには、擬似的な「ひとごと」的時間把握となる。しかしながら、発話時点(話し手の発話の現場)とは切り離せないものであり、〈できごと視点〉にとどまる。

5. 「いま」と時間表現語彙との共起

「いま」が「わがごと」的時間把握であること、時間の幅があってもあくまで発話時を中心とすること、単独では値を持たないことは確認できたが、これはいったいどういうことか。「いま」は時間の幅を表す「うち」「あ

いだ」「中」との間で次のような共起の差が生じる。

- (27) いま [のうち/*のあいだ/*^{じゅう}中] に買い物に行っておこう。
 (28) 今日 [のうち/*のあいだ/中] に買い物に行っておこう。
 (29) *現在 [のうち/のあいだ/中] に買い物に行っておこう

なぜ、上のような共起に差が生じるのか。「うちに」「あいだに」「中」の性質をもとに、「いま」の特性を考えて見る。

5・1 「うち」の「求心性」、「あいだ」の「開放性」

5・1・1 「あいだに」: 期間

寺村(1983)^{xi}や渡辺(1995)において、時間表現としての「あいだ」「うち」とその周辺語句の考察があり、「うち」「とあいだ」はともに「ある条件で前後から仕切られた時間帯」(渡辺 1995)を表すものとされている。そして、「Pうちに」は、現在の条件Pが消滅する時点強く意識して、「Pでなくなる時点までに、Pでなくなる前に」という意味を持ちやすく、「Pあいだに」は、条件Pの発生した時点と消滅する時点の両方に目配りし、その持続期間を捉えたものとされている。

このような「あいだ」と「うち」の相違は、次のいくつかの点から確認できる。まず、次の例においては、「うち」が不自然になる。

- (30) 本と本の {あいだ/*うち} に手紙がはさまっている。

手紙がはさまった「本と本のあいだ」や「我が家と隣家のあいだにある空き地」の「あいだ」は境界線によって区切られた内部を表す。同じように「1限目と2限目のあいだにあるチャペルアワー」は、1限目と2限目を両端としてそれによって仕切られた時間を表す。このように、「あいだ」は該当する時間や空間を切りとる条件によって、該当しない部分との切り分けが行われる。ただし、条件である境界線は内部には含まれない。

また、次の例でも「うち」が使いにくい。

- (31) 彼が話していた {あいだ/*うち} に二度もトイレに立った。
 (32) 試合が続いているあいだ歓声がやまなかった。(渡辺 1995,p28) cf.*うち
 (33) 日本にいる {あいだに/??うちに} こんなことがあったよ。(寺村 1983,用例(71)を筆者改変)

「あいだに」は、「PあいだにQ」においてPに夕形をとることができるなど、Pに既に終わったできごとをとる

ことができる。すなわち、時間の流れのなかで自由に期間を切り取ることができ、期間の始めと終わりを確定されている。

次に、「うち」が許容され、「あいだ」が不自然になる例を見てみよう。

(34) これは間違いの{*あいだ/うち}に入らない。

複数の間違いをタイプや程度、内容によって分類して、ある基準をもとに並べた序列を想定しよう。上の例はその両端に位置する間違いには含まれた部分を指し示すわけではない。あくまで「間違い」というカテゴリーに含まれるかどうかを問うものである。すなわち、「うち」はあるものの内部のことであり、「Pのうちに」のPであることがP内部の性質である。「あいだ」にはこのような用法はない。

5・1・2 「うち」: 期限

過去の時点を切り取れない「うちに」は、原則として発話時に進行・持続している条件の終了のみを問題とする。

(35) 晴れているうちに洗濯をする。

(36) 明るいうちに庭仕事をする。

つねに発話時点で条件Pが出現・成立し継続状態にある場合に用いられる「Pうちに」では、その条件がいつ生じたかについての注目度は低い。その意味では「Pうちに」が表すのは、条件Pが持続する期間ではなく、終了する期限と言えよう。これについて寺村(1983)では「ただその時の幅ではなく、いずれその時が終わって、次の対立する時期に移行する、そういう未来のある時期と対立するものとして把握された時の幅」との説明がある。「PうちにQ」において、先にも述べたように、QがPのカテゴリーに属することを表すなら、条件Pが消滅すればQもあり得なくなる。このことを言い換えれば、「Pあいだに」は条件Pの有無の対立がQ実現や成立の可能性の対立となるため、そのタイミングを示すべく条件Pの持続期間を時間の流れの中に区切っているものであり、客観的な捉え方である。これに対して、「Pうちに」は発話時点においてQ実現の条件としてPを提示するものであり、Qの実現の有無が対立となっているため、条件PはQ実現の可能性を左右するものである。その可能性が消滅するのが条件Pの終了時点であるため、発話時に期限が意識され、条件Pの範囲内だけに注目する。時間の流れのとらえ方は〈主体視点〉である。

次の例も同じこととして説明できる。

(37) この三人のうちに犯人がいる。

先ほどの(31)と同じく、「三人のうちに犯人がいる」

ならば、犯人は3人の内部(最低誰か一人)ということであり、「晴れているうちに洗濯をする」ならば、晴れていることを条件として限定的に選択が行われるという関係を持つことを示している。このとき、犯人の枠を広げる発想はなく、洗濯をしない条件を取り上げることもない。このようなPにのみ注目して、その範囲に入ることを意識するという点から「うちに」は「求心性」(渡辺1995)を備えた表現とされる。

ちなみに、次の例では「Pうちに」のPはすでに終わったことであるにもかかわらず、「うちに」が使えるが、これはどういうことだろうか。

(38) 晴れているうちに洗濯をすませておけばよかった。

たしかに、「Pうちに」は過去のある時点だが、夕形は出現しない。Qの実現はその時点で問題にされていることで、発話の時点では、「PでないでQでない(洗濯はできない)」と状態にある。つまり、反実仮定の文となっている。Qの実現は条件Pにおいてのみその可能性が問題にされるという点で(Qの対立)、Qが可能なのはどんな条件かを問題にする(Pの対立)「あいだ」とは質が異なる。

5・1・3 「うちに」: 機会

さらに、「PうちにQ」には「PあいだにQ」とは異なる性質のあることが、寺村(1983)において指摘されている。

(39) ぐずぐずしているうちに、彼女は結婚してしまった。(寺村掲掲,用例(74), 下線は筆者)

上の「Pうちに」は期限を表すものではない。当初のQでない状態から、Qという状態にいたったプロセスに条件Pが関与していることを表している。なぜ、「うちに」はこのような用法を持つのだろうか。

「PうちにQ」の「Pうち」はP内部の閉じた世界のあり方であり、Q実現の可能性が条件Pによってのみ問題になること既に述べた。QであるためにはPであり、PでなければQもないという関係性は、そのまま、本来想定外であった彼女の結婚が生じたことの要因を条件Pに求めている。発話主体の心情としては、条件P(ぐずぐずしている)がなければQ(彼女の結婚)もなかったと考えているのである。

(40) 話を聞いているうちに涙が出てきた。

(41) せっかく髪を染めたのに、シャンプーしているうちに色落ちしてしまった。

これらの例も、やはり、「PうちにQ」が「Pの条件下にQがある」ことを示している。たとえば、(40)の場合、

時間表現「いま」の考察——「求心性」に注目して——

「我知らず」「不覚にも」などを「うちに」の後に挿入できる。(41)では、「シャンプーする」という動作を「長めに」「強く」で修飾することができる。つまり、この例はいずれも「涙が出た／色落ちしたのはいつの時点か」を問題にするものではないのである。条件Pはむしろ、「涙が出てきた／色落ちした」の要因であり、きっかけとなっているようにも見える。しかし、PとQに両者には明確な因果関係があるわけではない。条件Pはあくまで、事態Qが出現する機会、チャンスとして存在している。そう考えると、「期限」を表す「うち」もチャンスを表しているといえる。「晴れているうちに洗濯をする」ならば、「洗濯をする」チャンスが「晴れている」という条件であり、当該の条件がなくなればチャンスも消滅する。これらのことは、「Pうちに」と「Pあいだに」のPが質的に異なるものであることを示している。

5・1・4 「中」：構成要素全部

「中」は「あいだ」と「うち」の両方の性質を持つ。まず、「中」は時間軸上を自由に切り取ることができる。

(42) 昨年度中に完成する予定だった。

(43) 来年中に駅前再開発に着手する。

「P中にQする」の「P中」は、「今日中」のような発話時のことばかりでなく、既に終わったことも未実現のことも表すことができる。「中」がつくのは時間的な幅を持つ名詞で、空間的にも広さのあるものに限られる。ただし、「部屋中」「教室中」というと、両端を明確にもたず、スタート地点からぐるりと一周といった範囲内の全体を指し示す。構成員が明確な場合、それらを網羅する次のような例がそれを証明している。

(44) 車の買い換えには家中が反対した。

Pであるもの全部であることが確認されることは、条件の範囲内を一周して確認を完了する操作が必要になるため、「終わり」の部分が注目される。その点で期限をあらわす「うち」と接近する。ただし、条件PはあくまでQをじつげんさせる範囲や環境として提示されているだけである。

また、動作の継続により時間的な幅を持つものにも「中」がつく。

(45) ドライブ中に隣で居眠りをするのはやめてほしい。

(46) 練習中に突然彼がやめると言い出した。

この場合は、動作が継続する時間を期間として表すのではなく、その動作を継続している場面という条件（場面）設定となる。しかし、「うち」のように条件Pの期限を過ぎるとQの実現が不可能となるなどの対立があるわけではない。「ドライブ中も、映画を見ている時も」のよ

うに、他の場面を並行して述べることができ、ドライブや練習はQの要因とは限らない。「配慮がない」「けが」など他の理由も考えられる。

「中」は「あいだ」と「うち」の両方の要素を持ちつつ、Q実現の場面としてある範囲を切り取って表示するものである。

5・2 「うち」「あいだ」「中」の相違点

前節での考察をもとに、「うち」「あいだ」「中」の性質について「PうちにQ」の相違点からまとめておく。

(47) うち／あいだに／Q

	PうちにQ	PあいだにQ	P中にQ
意味	期限、機会 要因	期間、中間	期限、場面 全構成要素
求心性	+	-	+
視点	わがこと	ひとごと	ひとごと
時間幅	不要	必要	必要
対立	事態Qと 事態非Q	条件Pと 条件非P	対立なし

「わがこと」視点の時間把握で、範囲の内部のみに注目し、条件Pが事態Q実現のベースとなっている、これが「うち」の求心性であった。このような「うち」は、時間的な幅を条件とするのではなく、発話時の条件が終了する時点が意識されればよい。また、発話時の条件がQの実現を左右するものとなっていれば、時間的幅の有無は特に関係ない。

これに対して、「あいだ」「中」は発話時に既に存在する条件であるという制約がなく、時間軸上に自由に設定できる。しかし、Q実現の可能性のタイミングを条件Pの終了まで維持することであるため、できごとの始まりより終わりを意識するものであり、「うち」と近い。また、「P中」をその範囲にある構成要素の集合体として意識することは「P中」が値を持つことを意味する。そして、それは時間で言えば幅を持つことを意味する。

このような違いは「この」とともに用いられる「このうち」と「このあいだ」を比較してみるとよく分かる。

(48) 3人の男がいる。このうち一人が嘘をついている。

(49) このあいだ友人とそっくりな男を{見た／ている／*るだろう}。

上の例の「このうち」と「このあいだ」を置き換えることはできない。「このうち」はあくまで、取り上げた条件の範囲内について言及するものである。「そのうち」と

しても同じである。一方、「このあいだ」は発話時以前のことを表す。述語が「ている」であっても発話時以前の経験の意味になり、未実現のこの場合は不自然になる。

「この」は条件の内容を具体的に示さないで、その場面で出現しているものや確定しているものを条件とするほかないのである。すると、発話時点が終了点とならざるを得ず、それ以前に開始点があってはじめて両端が確定するので、事態の発生や実現は発話時以前となってしまう。この「あいだ」は発話時点に立っているので一時的に〈出来事視点〉である。なお、条件を具体的に示して「このあいだに」とすれば未実現のことにも適用できる。「そのあいだ」も同様である。

では、「そのうち」はどうか。

(50) 彼ならそのうち帰って {*きた/くる/くるだろう}。

(51) すぐ帰ってきますから、{*そのうち/そのあいだ} ここにいてください。

「そのうち」は発話時以後を表している。しかし、発話時に条件の終了を確定した(51)の例では不自然になる。発話時に既に確定している条件の場合、終了時点を確認すれば「期間」となりうる。「そのうち」は発話時の条件を表示し、発話時以後に終了することは意識しているが、その時点を確認するものではない。「彼が帰ってきた」ら「そのうち」が終了する。あくまで、発話時のあり方を表示し、時間の進行に伴う発話時以後の時点を確認するのみである。その意味でやはり主体視点である。

5・3 「いま」と時間表現語彙

前節での考察をもとに、時間表現語彙と「いま」の性質を整理して確認するために前掲の用例を再度挙げる。

(52) いま [のうち/*のあいだ/*^{じゅう}中] に買い物に行っておこう。

(53) 今日 [のうち/*のあいだ/*中] に買い物に行っておこう。

(54) *現在 [のうち/*のあいだ/*中] に買い物に行っておこう

まず、「いま」において「いまのあいだ」が使えるような場面とは、のような、「いま」に当たる条件の出現から終了までが、そのような条件のない状態と明確に区別されている場合に限られる。

(55) 彼が居眠りをしている (という状況が生じている、まさに) いまのあいだに逃げだそう。

おそらく、Qの実現不可能な(逃げ出せない)条件非Pと対立する条件Pとして「居眠り」があり、それが始ま

る時点が明確に意識されていると考えられる。「昨日と明日にはさまれた内部」として今日を捉えるならば「今日のあいだ」もありそうだが、その場合は、「今日(φ) 買い物に行こう」とするのが自然である。以上をふまえ、「いま」の特徴をまとめる。

(56) 「いま」の性質

①両端を明確にし、それらではさまれた内部を表す「あいだ」と共起しない。したがって、原則として「いま」を「非いま」と対立して捉えない。

②ある条件の持続期間と言う意味での時間的幅や場面を表す「中」と共起しない。したがって、単独で時間の幅や値を持たない。

③「うち」と共起することから、発話時点で継続する条件の終わりを意識するものであり、発話時に確定している条件が「いま」の内容(あり方)を示している。事態非Qと対立することによって事態Qが把握される。

次に、「今日」や「現在」を捉え直してみよう。「今日」や「現在」は、原則として、すでに確定したことや未実現のことを表す場面で用いられることはない。ただし、「3月15日現在」、「昨年の募集締め切り日であった1月15日現在では」といった「現在」を修飾する表現が用いられることがある。これは、既に終わった時点とその発話の「いま」としてとらえることを表したものととして、そのような用法のない「いま」とは異なる。

「今日」は昨日が終わってから明日が始まるまでという両端を持ち、時間の幅もあると考えられるが、「あいだ」と共起しない。これは、「今日のうちに」の「今日」が、発話時に話し手が属している時点として時間軸に並ぶ「昨日」や「明日」と同列の概念であり、時間軸上の点として認識されて、時間の幅を必要としないことを意味する。ただし、「今日」が発話時に未完了であるため、終了時点を確認する「期限」の意味になる。「今日中」が可能なのは、この用法の「今日」がQ実現の場面や環境となりうるからである。一方、「現在」は過去や未来と対立して捉えられると考えられるが、始まりと終わりが不明確なため、「あいだ」が共起しないし、構成要素すべてを網羅できないため「中」も使えない。さらに、終了時点が明確でないため、「期限」にもなり得ず、「うち」も使えないのである。

「いま」「今日」「現在」は、いずれも同類の他の時間

表現語彙と対比されることによって値を持つ。そして、「いま／今日／現在」のあり方は、「非いま／非今日／非現在」との対立によって表される。その意味では、これらの語句は「うち」と同じ「求心性」持つものといえる。

6. 語の意味が持つ「求心性」とは何か

「うち」の求心性とは、その範囲の内部が条件として意味を持ち、その条件ではないものとの対立を想定しないということである。つまりその条件の典型に意味が収斂することと言い換えることができる。先にも述べたように、「PうちにQ」ならば、PであることがQの必要条件である。しかも、発話時に確定している条件がPであるため、P以外のありかたを問題としない。条件Pの持続期間ではなく、あり方を問題とするため、時間的な幅や長さが問題とならない。このようにある領域の内部であることがそのあり方を表示していて、それのみに収斂するものを、ここでは語の意味の〈求心性〉とよぶことにする。「領域の内部」とは一定の区切られた範囲の内部ということであるが、「ある区切られた部分を除いた他すべて」が境界部分を問題とせず、典型的なあり方を表示しているのなら、これも〈求心性〉となる。このような「求心性」は時間や空間表現の一種である「より」や量や程度の表現である「ほど」にも見られる。

「から」と「より」はともに起点を表すとされるが、いくつかの点で用法の違いがある。たとえば、「それから」は添加を表す接続詞だが、「それより」は添加ではなく、話題の転換を表す場面で用いられることが多い。

(57) まず、サイコロを振ってください。{それから／*それより} 出た目の数だけ進んでください。

(58) 「春休みどこか旅行に行こう。」「{??それから／それより}、まず飯食いに行こう」

このような話題転換の「それより」を川端(2002a)^{xii}では「離脱」の用法とした。この「離脱」とは、「論より証拠」や「これはコーヒーというより茶色のお湯だ」のような事態を選択する用法と共通性を持つ。「P(という)よりQ」はPとQを比較し、前者Pを不適格、後者Qを適格としてQを選択する操作がある。このような比較してよりよいものを選択する操作を形式的に活用して、それまで俎上にあった話題を排して、より適格とする新たな話題を持ち出すという操作である。話題の転換のしかたとしては単に二つの話題を天秤にかけた結果を示すものであり、論理的な根拠はない。ただ、比較優位事項の選択というポーズを当てはめることによって、新たな話題への円滑に誘導するものである。

このような「より」の特徴については、中世以降交替可能な「より」と「から」が、環境によって出現に特徴があることを述べた小川(2003)^{xiii}の考察が興味深い。小川(2003)は口語資料の出現する室町期の文献を用い、「より」と「から」がともに使用比率の高い資料では、「て」とともに用いられる「てより」が「以来」、「てから」が「継起」の意味といった使い分けがなされていると述べている。「PてよりQ」では、P時点を境に事態Qの出現が継続していること、すなわち、それまでとは出現の様相が変化したことを示す。一方、「PてからQ」では、後件に一回性の述語が見られ、Pをきっかけとした次の展開への進展や状況の累加が見られるものとなっている。「風邪をひいて学校を休んだ」の「て」と同じような用法である。

「Pから」はPを出発点とした次の段階への進展であり、次の状況が前の事態のきっかけとなる継起性を持つ。この場合、最終的でなくとも帰着点(結果)が示される。一方、「Pより」は選択によってPが排除され、最低限P以外のものであることが表示される。Pからの離脱とともにP以外のものに収斂される。この場合起点Pの帰着点はP以外という範囲の内部すべてとなる。それは一方の否定であるため、出発点に対する帰着点ではない。このような「より」も一種の求心性を持つものである。

さらに、「ほど」と「くらい」についても同じ傾向が見られる。

(59) 水をこれ{くらい／ほど}入れます。

(60) 彼{くらい／ほど}背が高い。

「くらい」は、「PくらいQ」において「これ」や「彼」の評価や程度を具体的に示さなくても用いることができる。しかし、「これほど」や「彼ほど」は「これ」や「彼」の程度が示されなければならない(川端2002b)^{xiv}。たとえば、程度の大きさを目盛りとして小さいものから大きいものまで並べた程度スケールがあるとすると、「くらい」はそのどの目盛りをも表すことができる。一方、「ほど」は「PほどQ」において、「Pほど」がどのような値を表すのか、そのあり方がQによって示されなければならない。つまり、Qについて「Pほど」であると認定できる境界を越えた範囲については、程度大に向かう方であれ、逆であれ、そのあり方をすべてPと認定する。したがって、程度スケール上のその範囲内では、すべてPと言うあり方に収斂する。これもまた「求心性」といえる。

7. 「いま」の機能

「いま」の性質は先にも述べたとおりである。ここに

再度挙げておく。

①両端を明確にし、それらではさまれた内部を表す「あいだ」と共起しない。したがって、原則として「いま」を「非いま」と対立して捉えない。

②ある条件の持続期間と言う意味での時間的幅や場面を表す「中」と共起しない。したがって、単独で時間の幅や値を持たない。

③「うち」と共起することから、発話時点で継続する条件の終わりを意識するものであり、発話時に確定している条件が「いま」の内容(あり方)を示している。事態非Qと対立することによって事態Qが把握される。

この「いま」が5節で見たような「求心性」を持つとはどういうことか。次の例を見ると、発話時や事態の実現時点をどこに設定したかについて、「いま」を用いることにより話し手と聞き手が共有していることが分かる。

(6 1) {いま/φ} 笑ったね。

(6 2) {いま/φ} 持っています。

「た」は事態の確定であり、結果の存続も含むものであるため、「笑ったね」の場合は発話時に笑っていてもいい。しかしながら、「いま笑ったね」は、「た」があるために「いま」が発話以前のことと解釈されるので、発話時にはすでに笑顔が消えていると考えられる。また、「持っています」は単なる意思の表明だが、「いま持っています」は実現が急がなければならない。

「いま」の「求心性」とは、本来時間の幅のある事態や時間軸上に自由に出現できる事態について、発話時点で収斂する性質のことである。それは、話し手が当該事態が時間軸上にどう位置づけているかを示すことによって、話し手自身の時間軸上の位置(どの時点にいるのか)を示すものである。事態の確定・終了を認定する時点が「いま」であり、「いまX」における話し手の発話時は事態Xの完了で終了する。しかし、「いま」が用いられる以上、次の事態へは進んでいない。つまり、できごとの開始と終了という幅があるにもかかわらず、それらをすべて「いま」の内部(範囲内)のあり方として時間の幅から脱却する。「新作映画はいまひとつだ(いまひとつ物足りない)」のような程度表現も、映画を見た時点に関わらず、判断や評価が発話時に行われたことを示している。「いま」の時点での不十分という評価を表すものとなる。「いま」は1など最小限で限りなく○に近いものとのみ共起するもの、「いま」の求心性を示していよう。「あと三つ」のような差し引きやプラスアルファを表すものではない(Kawabata2009)^{xv}。

「あることが終わってから次のことが始まるまで」ことや「事態の開始から実現まで」の含み持つ時間の幅と事態の進展を一括したものが、話し手にとっての発話時

現在「いま」である。そして、その内部に現れる「あり方」に収斂する点が、「いま」の〈求心性〉といえる。

参考文献

- ⁱ 渡辺実, : 所と時の指定に関わる語のいくつか—意味論的に—, 国語学, 181, 18-29, 1995
- ⁱⁱ 仁田義雄: 副詞的表現の諸相, くろしお出版, 東京, 2002
- ⁱⁱⁱ 森本順子: 現代語の時間表現—「今」について—, 研究論叢(京都外国語大学), 64, 155-171, 2005
- ^{iv} 田口慎也: 時間表現における「コ系指示詞」と「今」に関する考察—「コ系指示詞+空間表現」と「今+空間表現」を中心に—, 日本認知科学会第27回大会ポスター発表, 2008
- ^v 田窪行則: 談話における名詞の使用, 日本語の文法(4) 複文と談話, 岩波書店, 東京, 193-216
- ^{vi} 市川保子: 続・日本語誤用例文小辞典—接続詞・副詞—, 凡人社, 東京, 2000
- ^{vii} 竹内直也: 「これまで/から」・「今まで/から」の意味的相違について, 日本エドワード・サビア協会研究年報, 21, 27-37, 2007
- ^{viii} 阿部宏: 「あと」の時間的用法再考, 東北大学文学研究科研究年報, 51, 256-245, 2001
- ^{ix} 碓井知子: 空間から時間へ—「アト」(跡・後)の認知的観点からの考察, 日本認知言語学会論文集, 3, 63-73, 2003
- ^x 川端元子: 「あと」の用法から見た「いま」のとらえ方, 日本語学最前線(田島毓堂編), 大阪, 2010
- ^{xi} 寺村秀夫: 時間的限定の意味と文法的機能, 副用語の研究(渡辺実編), 明治書院, 東京, 1983(寺村秀夫論文集I, くろしお出版, 東京, 127-156, 1993に再録)
- ^{xii} 川端元子: 「離脱」から「転換」へ—話題転換の意味を獲得した「それより」について—, 国語学, 53-3, 48-62, 2002
- ^{xiii} 小川志乃: テヨリとテカラの意味的相違に関する史的考察, 国語国文学研究(熊本大学国語国文学会), 38, 2003
- ^{xiv} 川端元子: 程度副詞相当句(節)「Pほど」について, 日本語教育, 114, 40-49, 2002
- ^{xv} M.Kawabata: The Adverbs *ato*, *mou*, and *ima* as Modifiers of Temporal Expressions, WAFL6 proceedings, 2009

(受理 平成 23 年 3 月 19 日)